

報告テーマ

都市化の現状と特徴：日本と中国との比較より

氏名(所属)

焦 必方(中国・復旦大学)

要旨

日本と中国の都市化には異なる特徴が見られる。日本の町村は主に農村地区に分布する。1889年に最初の都市が39箇所、誕生した。日本の都市化は主に「漸進的な形成」と「段階的発展的推進」など2つの特徴が見られる。前者は単一の「村」の基礎の上に町となり、市へと発展して行く。後者は主に歴史上3度の「市町村合併」によって形成・拡大した都市である。日本の都市体系は東京都の都市部23の区と市町村のうち790の市で構成される。人口の一局集中を除けば、日本では小規模都市が大量にあり、それは日本の都市化の重要な都市形態である。これまでのところ、日本は都市農村融合発展の段階に突入している。その一方で、小規模都市の過疎化問題がすでに日本の都市発展の新課題(障害)となっている。

一方、中国の都市は一種の「市中に市がある」ことが特徴である。県級行政区は中国全体に普遍的に見られ、そのうち市属区、県級市は都市化地区に組み入れられる。県は農村に典型的に組み入れられている。改革開放前の中国における都市化率は20%に満たなかったが、改革開放後、それが大きく変化した。中国の都市化は郷鎮企業を基礎とした「城鎮化」段階、深圳特区や浦東新区の設置に導かれた大都市化段階、そして現在は「新型城鎮化」へ改編される段階に突入している。これまでの中国の都市化は地域間不均等発展の状況にあった。たとえば、都市・農村の収入格差、農業への魅力喪失や後継者不足、一部地域での農村空洞化などの問題が発生していた。

総じて、日本と中国の都市化についてまとめると、(1)行政体(市町村)の設置基準が異なること、(2)大都市・中小都市の人口規模が一様でないこと、(3)都市化モデルの選択的安定性(中国は変化過程にあることから)が異なること(4)都市化の段階・過程が異なること、(5)政府関与の度合いが異なることなどを指摘できる。